

「ポレポレ基金」活動レポート（2013年7月1日～10月31日）

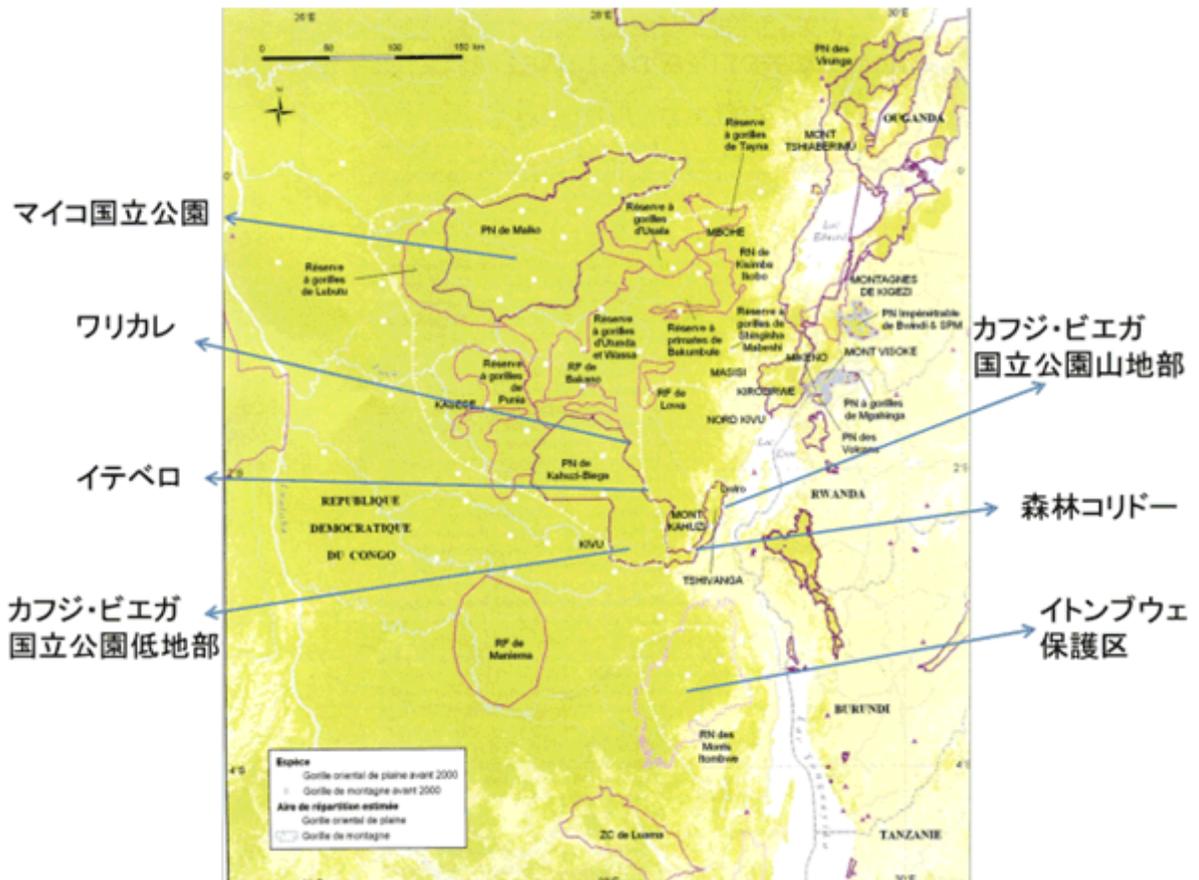
カフジ・ビエガ国立公園における類人猿の保護活動と環境教育 (2013年8月～10月)

この夏に、ポレポレ基金は新しい決断をしました。それは、これまでカフジ・ビエガ国立公園の山地部周辺に限られていたゴリラの保護活動と環境教育を低地部へ広げる計画です。5月にポレポレ基金の代表者ジョン・カヘークワがWhitley賞を受賞した際に、この活動を今後広げていくことを約束し、それを実行に移そうというのです。

カフジ・ビエガ国立公園は総面積6,000km²を有し、そのうち山地部（標高1,800～3,300m）はわずか600km²しかありません。9割は低地（600～1,800m）にあり、たった4kmの幅の森林コリドー（回廊）で結ばれています。山地部には国立公園以外はすべて見わたす限りの畑で、森林はありません。このコリドーが低地と山地をつなぐ命綱で、ここを通過してゾウやバッファローなど多くの森林動物が行き交います。ゴリラやチンパンジーもここを利用しています。ここから低地へ向けて保護の対策を立てなければ、低地と山地は断絶してしまうでしょう。

活動を広げる地域

すでにポレポレ基金のメンバーは、昨年底地を何度も訪問し、山地部で行っている活動を紹介して多くの賛同者を得ています。今回は代表者のジョン・カヘークワたち数名が国立公園の保護官たちと低地のイテベロやワリカレを正式訪問し、これから協力して保護と環境教育を推進していくことを約束しました。実はこれらの地域は1980年代の終わりから数年間、京都大学や欧米の調査隊が入ってゴリラやチンパンジーの生息調査をしています。1991年に起こった首都キンシャサの暴動や1996～2000年の内戦によって、調査は中断しているのです。内戦の間に多くの野生動物が食料として狩られていたと伝えられています。現在どのくらいの数のゴリラが生き残っているか危惧されています。ポレポレ基金が現地と協定を結んだことによって、調査を再開する見通しが立てられるようになりました。ポレポレ基金は、カフジ・ビエガ国立公園以外にも、西方の低地にあるマイコ国立公園、南方の山地にあるイトンブウェ保護区にも活動を広げる計画をしており、今年中にメンバーが訪問することになっています。



カフジ・ビエガ国立公園の山地部と低地部。森林コリドーと今回ボポフの活動を広げる地域



ゴリラの調査補助員たち



カフジ・ビエガ国立園の入口に作られたゴリラの像

ゴリラの様子

現在、国立公園の山地部ではチマヌーカ集団と単独で遊動しているムガルカと名付けられたオスが観光の対象となっています。他のゴリラ集団も人に馴らす試みが続けられていますが、オスたちが突然死亡する事件が相次ぎ、まだ人に十分馴れていません。これまでは政治情勢が不安定だったため観光客が少なく、あまり急いで人に馴らす必要はありませんでした。でもこのところ

平和な状態が続き、観光客が増え始めたので、チマヌーカとムガルカだけでは訪問客をさばき切れなくなりました。ゴリラの健康や平穏な生活を保証するために、1日に8人だけ1時間の訪問しか許可していません。そこで、ゴリラを人に馴らす実績のあるジョンが、新たに他の集団を対象にして人付けを開始することにしました。その際、すべてのゴリラに名前を付け、それぞれのゴリラの動向を逐一記録しようということにしました。そうすれば、ゴリラの日々の様子が詳しくわかり、観光にも保護にも役立てることができるからです。私たち研究者もこの試みにできるだけ協力することにしています。



お父さんの背中で遊ぶ子供ゴリラ



よく食べよく歩くお母さんゴリラ



いたずら盛りの子どもゴリラ

アンガ中学校の様子

環境教育を実施しているアンガ中学校はたくさんの生徒たちが通っています。今年の雨季で大雨が降り、屋根が雨漏りするようになりました。そこで新しくトタン板を購入し、屋根を張り替えることにしました。7月～9月は乾季なので、なるべく次の雨季までに屋根の修理を終えようと努力した結果、何とか9月中に完成にこぎつけることができました。中学生も小学生も、そして幼稚園児たちも10月から新学期が始まりました。みんな元気で学校に通っています。

このところ平和が続いているせいか、人々の顔も明るく、ゴリラたちもみな無事に過ごしています。子どもたちが村々に植林をして世話をしている木々もすっかり大きくなりました。最近ではこれらの樹木を建材にして家を建てたり、家具を作ったりしています。20年にわたるポポフの地道な活動がやっと実り始めています。



改修を始めたアンガ中学校



新学期に登校してきた中学校の生徒たち